

小社発行の「看護学事典」の執筆者の皆様は、事典で解説していただいた用語にまつわるエッセイをご執筆いただきます。

# 楽しく読んじゃう 新★看護学事典

第5回

## プロアクティブ・コーピング

ストレスを突き止め、弱めようと先を見越して、率先して行う対処行動であり、能動的コーピングともいう。(看護学事典第2版より)

# 長期的な挑戦

濱田 珠美 Hamada Tamami  
旭川医科大学准教授

「いつか、1年か2年かわからないんだけど、まあ死ぬかもしれない。その時に家族に何が残せるかなと考えた」

これは、進行非小細胞肺癌の診断を受けた50代の男性患者が、その時に考えたこととして語った言葉です。プロアクティブ・コーピングの解説を執筆する時、私は進行期の非小細胞肺癌患者の体験を「自己の見通しを持つ体験」<sup>1)</sup>として記述した以前の研究を連想しました。私は、長く肺癌患者のケアに携わった臨床経験から、彼らが進行非小細胞肺癌の病名告知を受け、厳しい現実に向き合っても、ただ打ち崩れるわけではない姿を知っていました。そこで、この体験には彼らのどんな“潜在力”があるのか、インタビューをして書き起こす研究をしたのです。

ところで、なぜ、私は先述したような患者の言葉を連想したのでしょうか？ おそらくプロアクティブ・コーピングという用語から連想したのではなく、事典の解説に記した「深刻な病気やそれによる長期的な挑戦」という状況が、今日の進行非小細胞肺癌患者の置かれる状況そのものだと感じたからです。

しかしながら、これは進行非小細胞肺癌患者ばかりが置かれる状況ではありません。今日のがん患者の多くが、進行がんの診断後、長期的化学療法や臨床治験に参加し延命を図っています。彼らは、長期的な挑戦を受け、日常では仕事、家事、子育て、そして、医療費のやりくりを心配して取り組んでいます。この日常の営みにおいて患者が先々を見越して取り組んでいる姿、あるいは、どうしたらよいのかと悩む姿を私たち看護者はよく知っていませんか？

先述した患者は、遺していく愛する家族の生活に不安を感じていましたが、家族のこれからをさまざまに具体的に想像し考え、治療中は仕事を続け収入を得てやればよいと思い描くようになりました。そこで、仕事が続けられるよう外来治療日を自ら医師と相談する積極的な調整をし治療を続けました。

この患者の体験のすべてを読み直し、私はプロアクティブ・コーピングでは「積極性と時間の観点」を組み入れ、より広い見方をするということを納得して書いたのです。

■ 引用文献 1) 濱田珠美・小松浩子：標準的治療を受けている進行非小細胞肺癌患者の自己の見通しを持つ体験, Palliative Care Research, 6(2), p.222-226, 2011.

日本で唯一、看護職だけの  
執筆による事典。  
待望の第2版ができました。

## 看護学事典 第2版

A5判 / 横組1200頁 / 2色刷  
ISBN 978-4-8180-1601-9  
定価(本体6,600円+税)



【総編集】  
見藤隆子・小玉香津子・菱沼典子

【内容紹介】  
項目語：約4500語 ← 約500語追加  
索引語：約1万4000語 ← 約2000語追加

★本書は単なる辞典(ことばの解説)ではなく、看護学領域における事典(ことばの解説)として編集しました。

お問い合わせ・販売はコールセンターまで  
TEL: 0436-23-3271 FAX: 0436-23-3272  
<http://www.jnapc.co.jp/> 日本看護協会出版会